

## 長崎キリシタン考(3)

長崎史談会 幹事 村崎春樹

## イエズス会領長崎

さらに、大村純忠はイエズス会に長崎の地子(税)と船舶の碇泊料の徴収権も併せて寄進された。

貿易都市長崎を支配地としたイエズス会は、この長崎に二つの役割を担わせようとした。

その一つは、南蛮貿易拠点であり、イエズス会が南蛮貿易の主要品目であった生糸の中国広東商人からの仕入れ、長崎における一括販売権を確保するため、マカオにおいてはイエズス会司祭カルネイロが長崎開港の一年前の元亀元年(1570)に生糸輸出カルテルを結成、長崎の岬の先端に立っていた岬の教会内カーザ(建物)に生糸倉庫(生糸貿易センター)が設けられた。

これにより、イエズス会は南蛮貿易を自己の統制下に置く事で多額の資金を得るようになった。この資金は、イエズス会が日本で行う重要な資金となった。

この様な仕組みがマカオ・長崎に存在することにより、天正15年(1587)の豊臣秀吉による伴天連追放令が出て、秀吉が南蛮貿易を存続させた事により、イエズス会が長崎岬の教会を確保し続けることで、長崎に強い影響力を保つことが出来た。

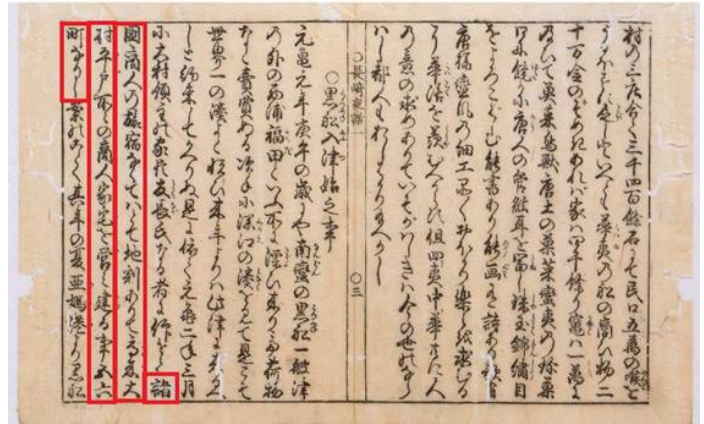
もうひとつの役割は、スペインの植民地化による武装拠点で、当時のイエズス会日本支部の最高責任者の準管区長ガスパール・コエリヨ(Gaspar Coelho)は、大砲を搭載したフスタ船を建造するなど秀吉に対し挑発的行動やキリシタン大名の有馬晴信・大友宗麟などに秀吉に敵対する事を求めた。キリシタン大名たちが拒否するとフィリピンには援軍をマカオへ大規模軍事支援を要請した。これらの軍事力によりイエズス会領長崎を武装要塞化し、スペインの植民地を目指したが、援軍や軍事支援は共に拒否されて、この構想は頓挫する。

このガスパール・コエリヨの行動と島原天草の乱(天草一揆)によって、徳川幕府はキリシタン勢力と外国勢力が結びつき日本の植民地化を目指すものと考え、キリシタンや外国に対する恐怖心が禁教令の徹底した取締を行う要因となった。また幕末の攘夷思想に結びついていった。

## 長崎の商人たちとポルトガル船貿易

長崎開港当時、長崎の町の様子を西川如見は『長崎夜話草』において「諸国商人の旅宿なくてはとて地割ありて高木、大村、平戸所々の商人家宅を営み建る事。五、六町あり」と記している。

また、同じ『長崎夜話草四之巻』長崎清民一人には「…唐人にも頼もしき、まことある人なりとおもへるありて、一とせ入津せし船の旅館と頼みなんとて、船主より了心が名を公けへ書付さし上、侍りしかば、やがて布屋了心とて



めし出され、船主の願ひの如く汝を旅館に免許あるべしとおほせごとありし。其比長崎に来たれるもろこし船は、いずれも因みにしたがひ、商家を旅舎と定めありて、その荷物悉く宿のあるじのまかないにて、徳を得ること山の如くにて、一夜がほどにも富る身と成ことなれば、神にいのり、仏にねがひても、誰かは是を有難しと受けざらん。…」とあり。

長崎の町が、諸国商人の宿としての機能と、さらに唐船やポルトガル船の荷主が旅館を選定して、旅宿が決まる制度であったことが判る、これが差宿制であった。この差宿制度では、船の荷物すべて賄(まかな)うことが前提であるが、この場合の賄いとは、一般的な意味の食事を賄うと云う意味ではなく、荷主に代わり、荷物の販売や購入、売れ残りの荷物の委託販売などを行うことをである。

差宿には多額の売買手数料(口銭)や代金が支払われた。このため、差宿となるためポルトガル船や唐船が入港すると、われ先にと小船が長崎港口に出迎えて、乗組んでいる荷主たちからの差宿の指名を争った。

この差宿が長崎商人、貿易都市長崎の6ヶ町に居住する商人の主な商売であった。

当然ながら、ポルトガル船の差宿になるには、キリシタンであることが大前提であった。また生糸の取引を仲介するためには、その取引場所であった岬の教会での取引に参加できるのは、当然キリシタンであることが必要であったと考えられる。

このように、イエズス会領長崎が成立する以前から、長崎において商売するためには、キリシタンであることが必要であり、これにより長崎商人の多くがキリシタンとなった。この当時の口銭は、1割であったと考えられている。(つづく)